

看護学生と国家試験

NHO 千葉医療センター附属千葉看護学校

副学校長

橋口 広子

国立病院機構の附属看護学校（以後 看護学校）の多くは、毎年12月頃から翌年2月中旬ごろまでの期間、3年生の看護師国家試験（以後 国家試験）に向けた学生支援に追われている。学生支援の具体策としては、①学習強化策としての補修講義の計画・実施、②過去実施した国家試験模擬試験結果の振るわない学生を対象とした個別学習指導、③不安が強く国家試験本番で実力を発揮できないと思われる学生への精神的支援などである。

看護学校の国家試験合格率については、毎年全国平均を上回る高い合格率を誇っている。このことは、看護師を目指している高校生等にとって、入学志望校を選択する上での大きなアピールポイントの一つとなっている。

国家試験の出題範囲については、看護学校3年間で学んだ内容を網羅しており短期間でマスターすることは難しい。国家試験受験勉強のベースには、3年間で培った看護に関する知識があり、学生はそれらを想起し、関連させながら理解を深めていくのである。特に実習で体験（学習）した内容については、イメージしやすいためか理解の深まりが早い。まさに「百聞は一見にしかず」だなと実感する。このことから、実習と国家試験の勉強をリンクさせる学習支援に取り組んでいる。具体的には、事前学習で行う実習病棟における代表的な疾病（病態）、治療・

検査・看護の理解について、国家試験過去問題を学習しながら理解を深める方法を取り入れている。

国家試験が近くなると、3年生の顔つきも変わり必死で勉強している光景を目にする。また、自己学習で解らないことなどを教員に質問したり、学生同士で教え合ったりする場面がよくみられる。この時期学生からは「1年生の時の解剖生理の授業をもう一度受りたい」「もっとちゃんと授業を聞いておけばよかった」などと、今だからこそ授業・実習の重要性を痛感する声が多くある。また、雰囲気づくりとして学生間の会話の中で「スベル」「落ちる」などが禁句となり、「国家試験まであと〇〇日」という日めくりカレンダーを掲示してお互いのやる気を奮起したり、合格だるま、合格鉛筆、合格お菓子など神頼みグッズを用意したりと結構忙しい日々を送っているようである。

看護学生にとって、国家試験合格は看護師としてのゴールではなくスタートである。もちろん国家試験での知識だけがすべてではない。看護実践者としての基本的な技術力、患者さんに寄り添える医療人としての態度、社会人としてのマナーなど多くのことを3年間の学校生活で学んでいくのである。

私たち教員は、学生が3年間の学習を国家試験合格という結果で締めくくり、看護師としての第一歩を力強く踏み出して欲しいと強く願っている。